東方夢桜歌～A little tenderness and some courage～

REN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方夢桜歌～Ａ　ｌｉｔｔｌｅ　ｔｅｎｄｅｒｎｅｓｓ　ａｎｄ　ｓｏｍｅ　ｃｏｕｒａｇｅ～

【Ｎコード】
Ｎ８００１Ｙ

【作者名】
ＲＥＮ

【あらすじ】
ある日、とある少年が世界から姿を消した。少年が目を覚ましたとき、そこは自分がいた世界ではなかった。そこは、忘れられた者たちが集う楽園。少年は、そこで生きることを決意する。少年は何を想い生きていくのか、少女たちはどのように少年を受け入れるのか。これは、楽園で生きることを決意した少年とその楽園の少女たちの物語。

注：これは東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。苦手な方は見ないことをお勧めします。
なお、この小説の作者はド素人です。また、投稿も気分しだいです。
それでも、暇つぶし程度になればと思っています。

主人公設定（前書き）

はじめまして、ＲＥＮともうします。今回はこの物語の主人公の設定です。

主人公設定

名前：一狂咲　彩人≪くるいざき　あやと≫
年齢：１７歳
身長：１７５ｃｍ　体重：６０？
細身だが程よく引き締まっている
趣味：料理、読書、ギター（歌も含む）
容姿
黒髪黒目で上の中くらい。感情が昂ぶると目が金色になる特異体質。
性格
基本的に温厚だが子供っぽさが抜けておらず時たま悪戯をする。めったな事では怒らないが怒ると怖い。
自分が面白そうと思ったことに関して首を突っ込まずにはいられずに、そのせいでケガをすることもしばしば。好き嫌いがはっきりしていて、気に入った相手が困ったりしていると何かと手伝ってくれる。が必要以上には手を貸さない。嫌いな相手や興味の無い相手は基本的に無視。なぜか、子供や動物には異常なほど懐かれる。ネコ好き。炊事、洗濯などそつなくこなせるくらいには器用。
能力：「流れを司る程度の能力」
　「夢を繋げる程度の能力」
流れを司る程度の能力は、ありとあらゆる流れを自由自在にコントロールできる。また、操るだけでなく生み出すことや消すこともできる半チート的な能力。しかし、（時の流れを遅くする）などは燃費が悪い。
夢を繋げる程度の能力は、誰かの夢の中に介入することができる。しかし、自分では制御できずだいたい突発的に発動するがたまに任意の相手の夢に介入できることがある。
ちなみに、霊力と魔力が備わっており総容量は霊夢より少し劣るくらい。

主人公設定（後書き）

ちょっと、つけたし。容姿とか忘れたので。某黒猫さんの設定を使わせていただきました。

夢と現の境界（前書き）

やっと1話です。

夢と現の境界

夢。夢を見た。とても不思議な夢だ。
それが夢だと認知できたのには理由がある。俺は空中に漂うように浮かんでいた。
普通の人間なら、道具も使わずに空中に浮かぶことなどできない。
重力に引っ張られて落下する。にもか
ｓｉｄｅ～？？？～

かわらず俺は浮いているんだからこれはもう夢で確定だろう。
そうして自分の中で結論づけてふと、周りを見渡した。
眼下には、今はもうほとんど見られないであろう雄大な自然が広がっていた。
木々が生い茂る森、山の上から流れる川、燦々と照りつける太陽とどこまでも澄んでいる青空。どれをとってもこれほどまでに美しいと感じさせる自然が広がっていた。

？「綺麗だな、こんなに綺麗な場所今まで見たことねぇや」

現代は人工的に造られたもので溢れかえっている。今、残っている自然も人の手が加えられたもののほうが多いように感じる。
しかし、ここは人の手など加えられた形跡がまるで無く自然があるべき姿で存在している。
それは、現代で生きる少年にとってとても新鮮なもので少年はしばしこの大自然に見とれていた。

？「これが夢じゃなかったらよかったのにな、あの腐った世界よりもこの世界のほうが楽しそうだ」

少年は羨望と諦めが混ざったような顔で苦笑し、そして思ったことを口にした。
それは、少年のささやかな願い。

？「もし生まれ変わったら、今度はこっちの世界で生きてみたいな」

そう言った瞬間、意識が遠のくのを感じた。少年は少しさびしそうに

？「もう少しだけ見ていたかったな」

そう言って、意識を手放した。

夢と現の境界（後書き）

夢のなかの話でした。

夢から現実、そして幻想へ（前書き）

どうも、ＲＥＮです。
今回は、現代編を一気に詰め込みました。それと、あの人が出てきます。それではどうぞ。

夢から現実、そして幻想へ

カーテンの隙間から差し込む光で目が覚めた。

？？？「んー、朝か」

俺こと狂咲（くるいざき）　彩人（あやと）は朝が弱い。夜更かししたわけでも、低血圧なわけでもないのに朝が弱いのだ。

彩「5時57分、アラームの3分前に起床か。」

伸びをひとつして着替え、朝食を作るためにキッチンへ向かう。一人暮らしなので当然だが。俺には親が居ない。いるにはいるが俺は親と思っていないし、あっちも自分のことを息子とは思っていないだろう。ただ、生活費などは振り込んでくれるけど。

別に寂しくはない。俺をここまで育ててくれたばあちゃんがいたから。ばあちゃんは厳しかった。「男ができないのは妊娠と出産だけでいい」の信念の元、生活に必要なスキルは全て叩き込まれた。でも、とても暖かかった。俺がまだ小さいゆえに善悪の判断もできず迷惑かけたときも

婆「迷惑をかけていけないのは他人、迷惑をかけてもいいのは家族と信頼できる友達だけなんだよ」

と、言って笑って抱きしめてくれた。その言葉を聞いたとき、とてもうれしくて胸の中が暖かくて泣き笑いながら頷いた覚えがある。

それと、近所の人たちもとてもよくしてくれたから性格が曲がることはなかった。むしろ、近所の子供たちとよく遊んでくれるお兄さん的なレッテルを貼られていた。

前に、「ヒマだから遊んで」と近所の子供たちが数人家に来たことがある。理由を尋ねたら、八百屋のおばちゃんが「アヤちゃんのところに行けば遊びに困らないわよ」といったからだそうだ。それからというもの頻繁に子供が来るようになってついには家じゃ入りきらない人数になった。そしたら、八百屋やお肉やのおばちゃんたちが学校の使用許可（校庭限定）をとってきてくれた。恐るべき、おばちゃんパワー。いつもお世話になってるし、少しでも恩返しができたらと思って子供の相手をしている。何より結構自分も楽しんでるしね。

そんなばあちゃんも去年、寿命で亡くなった。とても、安らかな顔をしていた。葬儀には近所の人たちが大勢手伝いに来てくれた。ばあちゃんはとても人望がある人でよく相談事を、それこそ老若男女問わず受けていたから当然である。泣いたのは、ばあちゃんが死んだその日だけだった。おばちゃんたちは、俺のことをとても心配していた。「泣いたっていいのよ」と言ってくれる人もいた。そんな人たちに俺は、「もう十分泣きました」と言って笑った。そんな俺を見て、とても安堵した表情で「困ったことがあったら力になるからね」と言ってくれた。

そんな人たちに支えられて俺はここまで生きてきた。正直ありがたいと思う。ここの人たちは大好きだ。でも、やっぱりこの世界は腐っている。

彩「うん、今日もいい出来だ」

なんだか昔のことを想い帰していても料理の手は止まっていなかったみたいだ。まあ、長らくやっていたから体が覚えてしまったんだろうな。ばあちゃんは、料理の先生もやっていたから教えられたレシピは和・洋・中からインド・ギリシャ・イタリア・フランス、デザートも和・洋・中と何でもござれな感じだ。特に和食は高級料亭レベルだったらしい。

今日は学校がある日だからそろそろ行かないといけない。まあ、俺は勉強が嫌いだし?授業中は専ら、読書（小説）か楽譜を見て脳内再生のどちらかだけどね。それでも、成績は悪くない。一夜漬け最強。

彩「時間は8時、弁当は持った、忘れ物は無し。」

外に出て、家の施錠をし自転車に跨って

「そんじゃ、いきますか」

そのとき俺は気づいていなかった。上空に胡散臭い笑みを貼り付けた金髪の美しい少女が自分を見ていることに。

俺の通う学校は家から自転車で２０分のところにある小・中・高のエスカレータ式で小学生の頃から通っている。なんてったって成績さえ問題なければ受験なんて必要ない。勉強嫌いの俺からしてみればとても好条件なのだ。

子「「「あっ！、アヤ兄ちゃんおはよ～！！」」」

彩「おう！おはよっ！」

小学校から通えるので必然的に近所の子供たちと一緒に登校することが日課になっている。雑談しながら走っていると校舎が見えてきた。子供たちと別れ、自分の教室に向かう。

ク「おっ、彩人！おはよー」

彩「チャオッス！」

ク「相変わらず、そのあいさつなのな」

彩「いいだろ、朝も昼も夜も同じ言葉で済むなんて合理的だし」

ク「まあいいけど。それよりさ、いい加減サッカー部に入ってくれよ。お前運動神経いいし、絶対レギュラー取れるって。おまけに顔もいいし」

彩「またその話か、何度も言うけど俺は部活には入らないよ」

俺は部活には入っていない。めんどいし、なによりそんなことに時間を割いていたら商店街がしまってしまう。頼めば売ってもらえるだろうがやはりそれは申し訳ない。それにタイムセールは時間との戦いであると同時に近所のおばちゃんたちとの死闘の場である。俺はほぼ毎日、戦場で戦っています。

クラスメイトと他愛無い話をしながら席に着く。俺には、仲のいいやつはいてもばあちゃんの言う友達に値する奴はまだ居ない。例外を除いては、

？「アヤ、やっときましたね。もう遅いです、遅すぎます」

彩「早苗、ＨＲ開始３０分前の登校が遅いとはどういう了見で？」

早「私より遅い＝遅すぎ、の方程式が私の頭の中では確立しているのです。」

彩「ひどい話だな。」

その例外の名前は東風谷（こちや）　早苗（さなえ）小学校から今に至るまで同じクラス、席替えをしようものなら決まって周囲８つのうちのどれかになるという怖いくらいに腐れ縁っぷりを発揮している。
一時期腐れ縁って実は呪いなのではと本気で考えたことがある。それを早苗に話したら「諏訪子さまに聞いてみましょう」と若干暴走気味になったのは余談である。

早「そんなことより、今日はテストが帰ってくる日です。前回は不覚を取りましたが今回は抜かりはありません。」

こいつは何かにつけて俺に勝負を持ちかけてくる。テストの結果から体育の授業、家庭科の調理実習ｅｔｃ．．．とにかく勝負事にできそうなことは大体持ちかけてくる。ちなみに総合的に見ると俺の圧勝。いくつか負けたものはあるけどそれでも勉学では負けたことが無い。

彩「はいはい。叶いそうに無い、いい夢だね。」

早「む～～、そうやっていい気になっていられるのも今のうちですよ。」

と頬を膨らませながら抗議してくる。やべっ！なにこの生物、超かわいいんですけど！！
と、他愛ない話をしていると

先「おい、お前ら席に着け。ＨＲ始めるぞ。」

先生が来て出席を取り始めた。

このとき、まだ俺はあんなことになるなんて思ってもいなかった。

彩「やっと終わったーーー！」

今日一日のカリキュラムを終え、家路に着く。

早「また負けた・・・」

と隣で項垂れているのは、言わずもが早苗である。今日のテストの結果？俺の勝ちに決まってんだろ、まあ、５点差だったけど。

早「勝ったら、このフルーツ全部のせミラクルパフェを奢ってもらおうと思ってたのに～」

俺は、早苗との勝負のとき賭けを持ちかける。それは負けたほうは勝ったほうの言うことを常識の範囲内でひとつきくというものである。ただし勉学においては俺は５回勝ったら、早苗は常識の範囲の緩和が条件として加わる。めちゃくちゃ早苗贔屓だがこれは俺から提案した。理由？早苗に勉学で負けない絶対の自信とそのほうが燃

えるし面白そうだからだ。何が面白いって?早苗の悔しがる顔とか
早苗の悔しがる顔とか早苗の悔しがる顔とか、あと早苗の悔しがる
顔とか、かな。

彩「俺に勝とうなんざ2世紀はえぇよ」

早「でも5点差だったじゃないですか~」

彩「その5点がでかいんだよ」

早「まぁ、いいです。次で終わらせますから」

彩「負けフラグが立ったな」

そんな話をしながら帰路に着く。

彩「じゃ、俺こっちだから」

早「はい、明日は私より早く来てくださいね」

彩「だが断る!!」

お互いに軽口を叩き合い別れを告げる。

彩「じゃ、またな。早苗」

早「ええ、また。アヤ」

早苗と別れ俺は途中コンビニでおにぎりとお茶を買って家へと帰る。
自転車を止め、鍵を開け家の中に入る。

彩「ただいまー、って言っても返事は無いけどね」

一人暮らしなのだから当たり前だ。でも、もはや習慣になってしまったので意識しないでも口が動くのだ。そして、本来なら返ってくるはずのない返事が今日に限って返ってきたのだ。

？「お帰りなさい。待っていたわ」

彩「！！！？？」

居間に行くとそこには見事な金髪の美少女、というより美女が座っていた。そいつは、口元を扇子で隠しとても胡散臭い雰囲気を纏っていた。美人なのにもったいない。

彩「俺は、彩人。あんた、いったい誰だ？」

？「自分から先に名乗るなんて意外ね。普通、後者の言葉が先に出るでしょ？」

彩「あいにく、少し特殊な環境で育ったもんでね。で、あんたは、いったい誰なんだ？なぜ俺の家にいる？」

紫「私は八雲　紫≪やくも　ゆかり≫よ。さっきも言ったでしょ。あなたを待っていたのよ」

紫は胡散臭い笑みを深くしながら質問に答えた。

彩「昼間から俺を見ていたのはお前か？」

その問いに、紫は少し驚いた表情をしたがすぐに先ほどと同じ笑みに戻り

紫「あら、気づいていたのね」

彩「まーな、といっても気付いたのは昼過ぎだけどな。で、俺に何のようだ？」

俺は少しおどけた風に肩をすくめ、本題の話を促した。

紫「ええ、そのことなのだけれどね」

紫は、そこで言葉を区切りこちらを見据え言った。

紫「あなたにはこれから幻想郷で暮らしてもらうわ」

彩「は？」

紫はそう言うと手を横に払った。

彩「なっ！！！」

紫「あちらに着いたら博麗神社を尋ねなさい。そこで待ってるわ。」

その言葉を聞きながら体は不気味な空間に落ちてゆく。そして、意識もそれと同時に途絶えた。

夢から現実、そして幻想へ（後書き）

はい、あの人とは早苗ちゃんでした。次回は彼の能力が発動しちゃいます。つっても今回みたく長くするつもりはありません。
感想・誤字指摘がありましたらお願いします。
ではまた。

一人ぼっちだった少女　～ｄｒｅａｍ　ｓｉｄｅ～（前書き）

今回は彼の能力が発動しています。
それでは、どぞー

一人ぼっちだった少女　～ｄｒｅａｍ　ｓｉｄｅ～

ｓｉｄｅ～彩人～

気がつくと、そこは真っ白な空間だった。今朝の夢と同じような感じだ。ということは、これは夢か？でも、今朝の夢のように雄大な自然やどこまでも続く青い空はどこにも無く、先の見えない白い空間のなかにぽつんと俺が存在していた。

彩「これは、夢なのか？だとしたら、ちと殺風景過ぎやしないか？」

そんなことを考えていると、不意に声をかけられた。

？「お兄さん、誰？」

驚いて声がしたほうを振り返るとそこには少女がいた。可愛らしい赤い服に綺麗な金髪、頭にはナイトキャップのような帽子をかぶっていてとても可愛らしい娘だ。だが、それよりも目を引くものがあった。少女の背中から七色の結晶が付いた羽？が生えていたのである。

俺は、しばし呆然としていたが

？「ねぇ！お兄さんは誰なの？」

少女の声ではっとして取り繕うように自己紹介をした。

彩「ああ、ごめんね。俺は彩人。狂咲　彩人だ。君の名前は？」

フ「私はフランドール・スカーレット。フランでいいよ。」

お互いに自己紹介を済ませ、俺は気になっていることを本人に聞いた。

彩「なあフラン。その背中についている羽？は本物か？」

フ「そうだよ～。だって私は吸血鬼だもん。」

吸血鬼。おそらく世界でもトップクラスの知名度を誇る西洋の妖怪。その吸血鬼が目の前にいるのだ。正直信じられない。だが、この少女は嘘をついていない。日頃から子供の相手をしているせいか、嘘を見分けることができるようになっていたのだ。

フ「ねぇねぇ、彩人は人間なの？」

彩「ああ、俺は人間だよ。とても脆くて儚い一人の人間さ。」

わざと芝居がかった動きでフランの質問に答える。

少女はクスクス笑いながら

フ「彩人っておもしろいね～」

と言って二人で笑いあった。それから、いろんな話をした。主に互いの種族のことを質問したりそれに対して解答したり。それで知ったのだが十字架は吸血鬼の弱点ではないらしい。ちなみにフランは幻想郷にいるらしい。しばらくこのやり取りが続いた。

不意にフランの顔に翳りと少しの狂気の色が浮かんだ。

彩「どうした、具合悪いのか？」

俺は心配になりフランにそう尋ねた。

フ「ううん、違うの。この夢が覚めたら、また一人ぼっちになっちゃうなって思って。私は力が強すぎるから長い間地下に閉じ込められてるの。」

彩「長い間ってどのくらい？」

フ「４９５年間」

俺はその話を聞いて絶句した。そりゃそうだ。いくら力が強いからって４９５年間も一人で地下に閉じ込められるなんてそんなのは横暴だ。

気づいたら俺はフランを強く強く抱きしめていた。フランは驚いたようだが抵抗はしなかった。

彩「フラン、お前は自分が一人ぼっちって言ったがそれは間違いだ。」

フ「え！？」

彩「俺がいる。俺がフランを一人になんてさせない。」

それは、初めての感情だった。俺はただ、この少女を助けてやりたいと思った。まだ、会ってから数時間しか経っていないけどそう思えるくらい、この少女のことが気に入ったんだろう。

フ「だ、だめだよ！私の能力は【ありとあらゆるものを破壊する程

度の能力】。私の近くにいたら彩人を傷つけちゃう。私、彩人を殺したくないよ。」

フランの声はだんだんと小さくなって次第に嗚咽が聞こえてきた。
俺はフランの頭を優しく撫で親が子供をあやすような声音で

彩「心配してくれてありがとな。でも大丈夫、俺は死なないよ。」

と、とても穏やかな、しかし絶対の自信に満ちた笑顔でフランを見た。

フランは驚いたように目を見開き、それから顔を歪ませて、すがるようにして声を上げて泣いた。
今までガマンしていたものが、あらゆる負の感情がフランの頬を雫となって伝っていく。

彩「一人が寂しいんじゃない。自分は一人ぼっちなんだって思うことが寂しいんだよ。それと、その悲しみは決して忘れちゃいけない。それはフランだけの強さになるはずだから。」

俺は腕の力を緩め、今度は包み込むようにしっかりとフランを抱きしめ頭を撫で続けた。

フランの涙はとても綺麗な色をしていた

俺とフランの体が透けていく。目覚めが近いのだろう。フランは不

安そうにこちらを見ていた。そんなフランに俺は一言だけ言った。
それは、別れを悲しむ言葉ではなく再会を約束する誓いの言葉。

彩「またなフラン、――――――――！！」

フ「うん！！」

そう返事をしてフランドール・スカーレットは花のように笑った。
その笑顔に狂気の色は微塵もなかった。

ｓｉｄｅ～フランドール～

見慣れた天井、見慣れた壁、見慣れた床、いつもと変わらない私の世界。けれど心の中はいつもと違っていた。
とても暖かな気持ちで満たされていた。ふわふわした感じがとても心地いい。

フ「えへへ♪」

夢での出来事を思い返すたびに頬が緩む。４９５年間、他人の温もりに飢えていた少女にとってまさに至福の時間だったのだ。

しかし、そんな時間が夢だと分かった時普通なら絶望する。大きい幸せなら反動も大きいはずだ。
少女、フランドールは夢から覚めても絶望せず、むしろその目には強い光が宿っていた。

フ「絶対に迎えに行くからいい子で待ってろよ、か」

それは、夢から覚める直前に彼が言った言葉。彼が来てくれる保証はない。それでもフランは信じてみようと思った。
自分を救ってくれた、あの暖かくて優しい彼の言葉を。
それに、フランは直感的に感じていた。

フ「また、夢の中で彩人に会える気がする。」

だから、自分も頑張ってみようと思った。この力を扱えるように、この力と向き合うために。

フ「私頑張るから、いい子にしてるから、だから」

フ「だから、早く迎えにきてね彩人！」

少女は、どこにいるかも分からない彼に向けて言った。

一人ぼっちだった少女　～ｄｒｅａｍ　ｓｉｄｅ～（後書き）

なんだかすごくあっさりしているような気がします。
もうちょっと何とかできたかも知れませんが作者の文章力ではこれが限界です。
感想、誤字指摘ありましたらお願いします。

闇を纏う少女

ｓｉｄｅ～彩人～

俺は現在、博麗神社なる場所に向けて歩いている。
何故、見知らぬ土地で目的地の場所が分かるかというと少し前まで遡る。
夢から覚めた俺は、いきなり思考が停止した。
だって　十数匹の猫が自分に丸めた体を密着させ寝ているのだ。そのうちの一匹は腹の上で寝ている。
通りで暖かいわけだ。
起こすのも忍びないがこのままというわけにもいかないので体を起こす。
すると寝ていた猫たちも各々伸びをして周りでにゃーにゃー鳴いていた。

彩「さて、紫は博麗神社で待ってるって言ってたか？つーか、初めての土地で地図もなしに特定の場所に行くってこれなんて無理ゲー？」

せめて方角だけでも分かれば何とかなりそうなものだが。
俺は文字どうり猫の手も借りたい心境で聞いてみた。

彩「なあ、博麗神社ってどの方角にあるか知らないか？」

自分でなにやってんだろうなと思いつつどうするか考えようとしたとき、お腹に乗っていた猫がある方角を向いてにゃーにゃー鳴いた。
よく見ると、その黒猫は尻尾が２本あり緑の帽子を被って耳には金

の輪を付けていた。

彩「この方角にあるのか？」

そう聞くとまるで返事をするかのごとくニャーと鳴いた。

普通なら偶然で片付けるが今までの出来事からこの猫に乗せられるのも一興と思い、

彩「そっか、ありがと。助かったよ。」

と、黒猫の頭を撫でてやりその方角へ歩き出した。

ｓｉｄｅ～？？？～

？「不思議な人間だったな～」

彼が見えなくなった後、私は猫の姿から人の姿に戻った。

今日もいつものようにマヨヒガ周辺の猫たちを集めて言うことを聞くように訓練しようと思っていた。

が、猫たちは見つからずしばらく探していると毛玉を見つけた。

それは、探していた猫たちが一人の少年に寄り添って寝ていたのである

ここいら周辺の猫たちは警戒心が強く、猫の妖獣であるわたしも警戒を解くのには苦労した。

それなのに、この少年の周りには多くの猫たちが寝ている。

有り得ない。
ただの人間に最初からここまで近づき、ましてやとても気持ちよさそうに寝ているなんて。
だが不思議だ。寝ているからなのかどことなくこの少年には警戒心が沸いてこない。
他の子たちを見ていると自分も眠くなってきた。

？「ちょっとだけ寝ちゃおうかな」

そう思った時にはすでに彼の隣まで来ていて、彼を起こさないように猫の姿で彼のお腹に乗った。
何故そうしたか自分でも分からない。ただ、

？「いいにおい／／／」

とても安心できた。そのまま、彼の心臓の音を聞きながら眠りに落ちた。

起きた彼は、博麗神社に行きたがっているようだった。
だから、私は神社のある方角を教えた。
そしたら、彼はお礼を言って頭を撫でてくれた。
私の主とその主の主、二人とは違う大きくて暖かい手が私の頭を包んでいた。
しばらく撫でてくれたその手は不意に離れていき名残惜しくもあったが彼は皆にお礼を言って歩き出した。

？「気持ちよかった／／／」

頭を撫でられていた余韻を感じつつ、思ったことを口にしていた。

？「また・・・会えるかな。」

今度はこっちの姿で。

ｓｉｄｅ～彩人～

もうかれこれ数時間は歩き続けている。あたりは暗くなり始めていた。

今は初夏だから寒さで死ぬことはないだろうけど、できれば日が沈む前に神社に着きたかった。

日はとっくに沈み、空には綺麗な満月が浮かんでいた。

彩「しゃーない、今日はここらで野宿か。」

ここにきたときに、何故か持っていた自分のバック。

中身は三日分くらいの栄養食とお菓子、水が入っていた。

どれも家にあったものだ。紫が置いといてくれたのか？しかしどうせなら、神社に落としてほしかった。

と、どうしようもないことを思いながら空を見上げた。

彩「綺麗な満月だな」

？「そうなのか～」

彩「そうなのか～、じゃなくて空を見れば分かるだろ。」

？「ほんとだ～」

彩「それで、君は誰だい？俺は彩人って呼ばれてる」

ル「私はルーミアって呼ばれてるよ～」

唐突に始まった自己紹介、俺の言葉を真似るように話す少女だが、
俺は直感で感じていた。
こいつは人間じゃない。
フランや道を教えてくれた黒猫と似た雰囲気を感じる。
何より、彼女の周りには闇と形容するのがふさわしい黒いもやみたいなものを纏っていた。
俺と少女はほぼ同時に喋っていた。

彩「君は」

ル「あなたは」

彩「俺を食べる妖怪？」

ル「食べられる人類？」

そして、無言のままお互いに見つめ合う。
どのくらいの時間そうしていただろう。
１分？１０分？それよりも長く？経過した時間は分からないが沈黙は唐突に消えた。

彩「っぷ、くすくす、あははは！！」

ル「???」

ルーミアは突然笑い出した俺に訳がわからずきょとんとした顔を向けていた。

彩「いや、ごめんごめん。ほぼ同じタイミングでまったく逆の事言うからさ～」

そう言って、またからからと笑った。
どうやら笑いのツボに入った用である。
しばらく呆然と眺めていたルーミアだったが釣られたのか

ル「っふふ、くすくす、あははは」

ルーミアまで笑い出した。
そうしてお互いに落ち着くまで笑った後、俺はルーミアにひとつ提案をした。

彩「なあ、ルーミア？お腹が空いているなら俺を食べるよりも、もっといいものがあるぞ」

ル「それっておいしいの？」

彩「それは食べてからのお楽しみって事で。もし、満足できなかったら俺を食べてもいいよ。期待以上なら俺を食べないって約束してくれるか？」

ル「う～ん」

ルーミアは少し考え、やがて

ル「分かった。それがおいしかったら彩人を食べない。約束する。」
目を爛々と輝かせ、大きく頷いた。
嘘はついていない。
確認するとバックから板チョコを取り出し欠片をルーミアに渡した。
ル「これが、そのいいもの？」
彩「そ、まあ食べてごらん。きっと気に入るから。」
ルーミアはゆっくりと口に入れ、咀嚼し飲み込んだ。
ル「おいしい！！すごくおいしい！！ね、もっと頂戴！！」
どうやら気に入ってくれたみたいだ。
これで食べられることはないと思うが、今にも食べられそうな勢いで身を乗り出してくるルーミアに全体の半分をあげた。
とても幸せそうな顔をしてチョコを食べる姿は年相応の女の子にしか見えない。
俺はその姿を見ながらルーミアに質問していた。
彩「なあ、ルーミア、博麗神社ってどこにあるか知ってるか？」
食べ終わったらしいルーミアは、満足げな顔をしながら
ル「あの、紅白のいる場所？知ってるよ」
紅白とはおそらく巫女の事だろう。衣装が紅白だし。

彩「その場所を教えてくれないか?そこに用があるからさ」

ルーミアは少し考える素振りを見せ、上目遣いでこう言ってきた。

ル「私も一緒に行っていい?そしたら教えてあげる。」

ッッッ!!これは反則だろう。

美少女に上目遣いでお願いされて断る奴は男じゃねぇ。

彩「いいのか?ルーミアが迷惑じゃなければ願ってもないけど」

心の動揺を抑えつつ何とか平静を保てたようだ。

ル「決まりね!!それじゃ明日に備えてもう寝よう。」

そう言うやいなや俺の隣に腰掛け、もたれかかるように体重を預けてきた。

なんというかずいぶん無防備なんだな。

襲われるとか考えないのかね。

襲うつもりもないけど。

俺は断じてロリコンじゃない!!ロリコンじゃない!!

大事な事なので2回言いました。

ルーミアはすでに寝息を立てており、その寝顔はとてもかわいらしいものだった。

彩「明日には、着けるといいけど」

そう一人ごちながら意識を手放した。

闇を纏う少女（後書き）

ルーミアって可愛いですよね。見ているととても和みます。

氷精と弾幕ごっこ（前書き）

すみません。仕事で出張だったものですから投稿できませんでした。
たびたび、間が長い時もありますがご勘弁を。
それでは、どぞー。

氷精と弾幕ごっこ

ｓｉｄｅ～彩人～

ちゅん、ちゅん。チチチ。
小鳥のさえずりで目が覚めた。
朝が来たのだ。初夏といっても朝早くは、まだ野宿するには気温がいささか低い。
下手をすれば、体調を崩していたかもしれない。
しかし、それは無い。
むしろ、とてもさわやかな気分だ。
その理由は、いまだに俺の胸に頭を預けて気持ちよさそうに寝ている少女のおかげだ。
彼女と寄り添って寝ていたのでそれなりに暖かかった。
が、そのために体がガチガチに固まってしまった。
ほぐしたいところだが、この可愛らしい寝顔をもう少し見ていたかった。
少女の顔に手をそえそっと撫でる。

彩「ありがとな」

ルーミアを起こさないように小声でお礼を言った。
くすぐったかったのか身をよじり顔を胸にグリグリと押し付けてきた。
俺は苦笑しながら、もうしばらくはこのままで居ようと思いルーミアの頭を優しく撫でた。

それから、３０分ほど経ってからルーミアが起きたので朝食を摂った。
朝食後、顔を洗いたいのでルーミアに聞いてみた。

彩「この近くに水辺ってないかな？」

ル「あっちの方に湖があるけど、神社は～？」

彩「人に会うのにみすぼらしい格好じゃ印象が悪くなるだろ。だから、案内してくれ。」

ル「わかった。あっちだよ。」

湖があるであろう方向を指差しルーミアが言った。
が、動こうとしない。
どうしたのか？と、聞こうとしたら自分の後ろに回って肩に飛び乗ってきた。
いわゆる肩車である。

ル「おー、たか～い♪」

彩「ルーミア、何故そこに乗る？」

ル「なんとなく？」

彩「俺に聞くなよ・・・」

まあいいか、そんなことより顔を洗うために湖に向かった。
道中、ルーミアがとても上機嫌だったのは余談である。

湖に着いたので早速顔を洗い、うがいをして多少口の中がさっぱりした。
が、少し違和感を感じた。

彩「つめてーな」

いくら早朝とはいえ湖の水は驚くほど冷たかった。
ルーミアに理由を聞いてみると

ル「あ～、それはここら辺にチルノがいるからだよ」

彩「チルノ？」

ル「そ、氷の妖精で私の友達」

ルーミアがそう答えた瞬間、氷が降ってきた。
雹とかみぞれとかそんなレベルじゃない。
氷柱を人の腕くらいの大きさにしたサイズのものが降ってきたのだ。
俺はすぐにルーミアを抱えて走り出した。
自分たちがいたところは見事にちっちゃな氷山と化していた。

？「最強のアタイの攻撃をよけるなんて、あんたなかなかやるわね！」

その声は空から聞こえた。
見上げると、青い服に青い髪、頭には青いリボンを付けた少女がいた。
それだけなら、普通の可愛らしい少女だろう。
浮いている時点で普通ではないがこの際気にしない。
ルーミアだって所見では浮いていたし。

彩「氷の羽・・・」

少女の背には氷の羽が生えていた。
この少女がルーミアがさっき言っていたチルノなんだろう。

ル「チルノ～、おはよ～」

チ「あ、ルーミアじゃない！おはよー」

二人があいさつを交わす。
やはり目の前の少女がチルノであっているようだ。
それよりも気になっていることを聞いた。

彩「どうしていきなり攻撃してきたんだ？」

チ「そんなの決まっているじゃない、あんたがアタイの縄張りで勝手なことをしていたからよ」

と、胸を張って言い切った。
ルーミアに視線を送ると首を横に振った。
どうやらチルノが勝手にそう言っているようだ。
なんて傍迷惑な。

チ「そんなことより、アタイと勝負よ！！」

彩「なんで？」

チ「それは、アタイが最強だと証明するためよ」

俺はこの一言で悟った。
ああ、こいつは馬鹿なんだなと。

チ「それじゃ、いくわよ。」

彩「やべーな・・・」

はっきり言ってあのサイズの氷柱を食らって無事でいられる自身が無い。
ルーミアに助けを求めようとして、ルーミアの方を見ると

ル「彩人～、がんばって～♪」

完全に傍観者を決め込むつもりだ。
俺はため息を吐いて、

彩「しゃーない、やるだけやってみますか」

覚悟を決めた瞬間、先ほどと同サイズの氷柱が弾幕となって襲い掛かってきた。

彩「わっ、ほっ、おわっ！！」

何とかあたらないようにかわしていく。

チ「なかなかやるわね、ならこれでどうだ！」

チルノはカードのようなものを出して上に掲げて叫んだ。

チ「氷符『アイシクルフォール』」

叫んだ瞬間、今までとは異質の弾幕が襲ってきた。
両側から挟み込むように迫ってくる弾幕に気を取られ前方から来る弾幕への対処が遅れた。

彩「やべっ！！」

ル「彩人！危ない！！」

ルーミアが叫んでいるのが聞こえたが、それどころじゃない。
回避を諦め、来るべき衝撃に供え身を固くした。
が、いつまで経っても衝撃が来ない。
目を開けてみると、弾幕のスピードが極端に遅くなっていた。
弾幕だけじゃなく全ての動きが、まるでスローモーションの世界に入ったかのように遅くなっているのだ。

彩「これは、いったい・・・？」

考えても仕方ないので、とりあえず弾幕の軌道上から逸れた瞬間普通のスピードに戻った。
ルーミアの方を見ると安堵の表情を浮かべていた。

チ「今のをかわすなんて、あんた人間にしてはなかなかやるわね」

彩「そりゃ、どーも」

なんとか、危機は去ったが問題は他にある。
こちらは攻撃手段が無いのだ。
ゆえに、チルノを止める術が無い。

チ「じゃ、次行くよ。凍符『パーフェクトフリーズ』」

虹色の弾幕が無造作にばら撒かれた。
偶然、自分のほうには来なかったので動かないでいると玉の動きが止まり色が白になっていく、つかこちらに向かってきた。

彩「マジかよ！・・・ん？」

突然のことに驚いたが、さっきまでと違うことがあるのに気が付いた。

彩「弾幕一つ一つの動きが分かる！？」

どうしてこうなったか分からないが、ひとつ面白そうなことを思いついた。
飛び交う虹色と白色の弾幕、遠目から見ればとても綺麗だろう。
そう思った瞬間、ひとつのビジョンが浮かんだ。
それは、白と虹の玉の中で舞う自分の姿。
俺の体は自然に動いていた。

ｓｉｄｅ～チルノ～

アタイは勝利を確信していた。
人間が、おそらく初めてであろう弾幕ごっこで勝てる確率はほぼ０。
ましてや空も飛べず、弾幕も打てないただの人間だ。

負ける要素はひとつも無い。
むしろ、よく粘ったほうだ。
本当はスペルの一枚目で決まったはずだった。
だがあの人間はかわしていた。
どうやったかは分からないが運がよかったのだろう。
だから、2枚目で終わるはずだった。
それが・・・、

彩「なんで？なんであたんないのよーーー！！」

人間は踊っていた。
それも弾幕の一番集中している部分で。
その顔は笑っていた。
新しいおもちゃを与えられた子供のように、目を爛々と輝かせ襲いかかる弾幕を全て紙一重でかわして。
そして彼は踊り（かわし）きった。
スペルはあと一枚。

チ「なら、これで決めてやる。雪符『ダイアモンドブリz』」

そのスペルが宣言されることはなかった。

ｓｉｄｅ～彩人～

弾幕が止んだ。
攻撃が止まるのと同時に俺の舞も終了した。

なかなかうまくいったと思う。
とはいっても、迫る弾幕をかわす際に踊るように動くだけである。
何かをイメージしているとかそんなのは微塵も無い。
ルーミアの方から歓声と拍手が聞こえてくる。
それに軽く応え、チルノに意識を集中した。
どうやら最後の攻撃を行うようだ。
だが、チルノの声は第3者の声によってかき消された。

？「だめーーーーーーーーー！！」

チルノの後ろから緑髪の少女が腕を交差させてチルノに突っ込んでいった。

チ「ガッ！！」

いわゆるクロスチョップを食らったチルノはそのまま湖に落ちていった。

？「もう！湖は皆のものだっていつも言っているでしょ！！チルノちゃんが湖を独り占めしたら皆が困るんだよ！！！」

チルノが落ちていったのも気づかずに注意文句を並べる少女。
こちらから声を掛けないと話が進まなそうなので緑髪の少女に声を掛ける。

彩「あの～～」

？「あぁっ！チルノちゃんがご迷惑をおかけしました。私からよく言い聞かせて置くので許してあげてください。」

と、声を掛けたらいきなり謝られた。
とりあえず落ち着かせるために子供をあやす常套手段を使った。

彩「気にしてないから、とりあえず落ち着いて、ね？」

なでなで
と、緑髪の少女の頭を撫でた。

？「ふぇっ？あっ・・・はうぅ～／／／」

彩「落ち着いた？」

？「は、はいっ／／／」

うん、どうやら落ち着いたようだ。
若干、ルーミアがむくれているような気がするが気にしない。

彩「俺は狂咲　彩人。好きに呼んでくれ」

大「私は大妖精です。皆からは大ちゃんって呼ばれています」

彩「よろしく。時に大ちゃん」

大「なんですか？」

彩「チルノが湖に浮かんでいるんだが？」

大「えっ？きゃーーーーー、チルノちゃーーーーーーん！！！」

と、叫んでチルノのところに飛んでいった。

いじりがいがありそうだな、と思いながら腰を下ろしてチルノ救出劇を見ていた。
すると、ルーミアが隣に座ってこちらを見てきた。
どこかものほしそうな、何かを期待しているそんな目だ。
俺はすぐに思い当たってルーミアの頭に手を伸ばした。
なでなでなで
ルーミアは少し驚いたようだが、頬を朱に染め気持ちよさそうに目を細めた。
大ちゃんがチルノを抱えて戻ってくるまでルーミアを撫で続けた。
いつになったら神社に着くのか・・・

氷精と弾幕ごっこ（後書き）

チルノの弾幕で一番避けにくいのはアイシクルフォールだと思うのは私だけでしょうか？

楽園の巫女と普通の魔法使い（前書き）

連投かと思ったら日付が変わっていた・・・だと？

ｓｉｄｅ～彩人～

大ちゃんがチルノを抱えて戻ってくるのを確認した俺は立ち上がり服に付いた汚れをはたき落とす。
ルーミアも立ち上がり同じ動きをする。
さて、一悶着あったがそろそろ神社に向かうとしよう。

彩「さて、いいかげんそろそろ神社に向かうか」

ル「そうだね～、紅白もいい加減起きてると思うし～」

そう言うとチルノの介抱をしていた大ちゃんがこちらの言葉に反応した。

大「あっ、もう行かれるんですね。本当にチルノちゃんがご迷惑をおかけしました」

と、深く頭を下げてきた。

彩「さっきも言ったけど気にしてないって。それよりチルノが起きたら伝えてほしいことがあるんだけど」

そう言って大ちゃんに伝言を預けた。

大「分かりました。チルノちゃんが起きたら伝えておきますね」

彩「ありがとう。それじゃ、またな」

ル「またね～」

大「はい、また何時でも来てください」

それを聞いた俺とルーミアは別れを告げ、神社に向けて歩き出した。

大ちゃんは見えなくなるまで大きく手を振っていた。

ｓｉｄｅ～チルノ～

チ「あれ？・・・ここは？」

何時寝たんだっけ？と思いながらアタイは体を起こした。

大「あっ、チルノちゃん起きたんだね」

チ「大ちゃん・・・？」

隣を見ると大妖精ことアタイの友達の大ちゃんが居た。

頭が覚醒するにしたがって先ほどの記憶が思い出される。

確か、人間と弾幕ごっこしていてそれで最後のスペルを唱えようとした直後に背中に衝撃が走ったのだ。

そこまで思い出し、アタイは俯いた。

チ「そっか・・・アタイ、負けたんだ・・・」

負ける要素などひとつも無かった。
が、アタイは負けた。
目の辺りが熱くなり、溜め込んだものが押し出ようとしている。

大「違うよ、チルノちゃんは負けてないよ！」

チ「えっ？」

アタイは大ちゃんの言葉が信じられなかった。
実際にあの人間はここに居なくて、アタイは倒れていた。
普通は負けたと思うだろう。

大「実は彩人さんから伝言を預かっているの」

彩人とはあの人間の名前だろう。
そういえば、名前を聞いてなかったなと思いながら

チ「なんて、言ってたの？」

アタイはあの人間がなんて言ってたか気になり大ちゃんに詰め寄った。

大「『すっげぇ楽しかった。また今度遊ぼうな、そのときは決着つけようぜ。それまで今より強くなっていい子にしてろよ』って」

アタイはそれを聞いた瞬間、胸の辺りが熱くなった。
周りは妖精ってだけで自分のことを馬鹿にする。
それが悔しくて、情けなくて強くなろうとした。
でも、ぜんぜん届かない。
負けるたびに馬鹿にされる。

今回もそうだと思った。
だけど違った。
アタイと戦って、楽しいっていう奴は今まで居なかった。
逆にあっちのほうから、またやろうって言われたのは初めてだった。

チ「ふふふっ」

アタイは笑った。
可笑しくて、うれしくて今までこんな気持ちになったことなど無かった。

チ「面白い人間だったね」

大「とてもいい人だったよね」

アタイは強くなるって決めた。
見返すためではなく、次に会ったときもあの人間と楽しく遊ぶために。
チルノの目には力強い光が灯っていた。

ｓｉｄｅ～彩人～

俺目の前にはひとつの試練が立ちはだかっていた。

彩「ここをのぼるのか・・・？」

途中、鳥居が見えたからここに神社があるのは間違いない。
が、神社に続くであろう階段が問題なのだ。

そこまで高い山ではないが、階段はキツイ。

ル「早く行こうよ～」

ルーミアが急かしてくる。
ここで考えても仕方がないのでとりあえず登ることにする。

少年登山中・・・

３０分後、ようやく鳥居までたどり着いた。
今さらだがルーミアを降ろせばもう少し楽だったな、と思っても後の祭りである。

彩「ここが、博麗神社か・・・」

なんというか、自分の世界の神社と対して変わらない。
とりあえず賽銭でも入れるために、賽銭箱まで行った。
通貨が同じだとは思わないがこういうのは気持ちが大事だ。
ルーミアにも硬貨を渡し一緒に投げ入れる。
シャランシャランと鈴を鳴らし、二礼二拍一礼と願いを言った。

彩「これからも面白可笑しく暮らせますように」

ル「おいしいものがたくさん食べれますように。それと、・・・」

ルーミアの最後のほうはよく聞こえなかったが、頬が少し赤いような気がした
一通り参拝を終え、巫女さんが居るとの話なので探そうと・・・

？「ご参拝ありがとうございます。その願い叶うといいわね」

ズシャアッっとまるで狙ったかのようなタイミングで、紅白の巫女服?を着た少女が境内の裏の方から飛び出してきた。
疑問系なのは、腋が露出しているからだ。

?「博麗神社に賽銭が入っているところなんて始めて見たぜ。お前もなかなか稀有な奴だな」

巫女さんの後から、どっからどう見ても魔法使いな格好をした金髪の少女が歩いてきた。

彩「俺は、狂咲　彩人。好きに呼んでくれ。こいつはルーミアだ」

と、とりあえず自己紹介しておく。

霊「彩人ね、私はこの博麗神社の巫女をやっている博麗霊夢よ」

魔「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ」

お互いに、自己紹介を終えると魔理沙が聞いてきた。

魔「そいつ妖怪だろ?なんで妖怪が人間と一緒に居るんだ」

霊「理由しだいじゃ退治するわよ」

霊夢はルーミアに向けて殺気を飛ばす。
俺はルーミアの前に立ち、

彩「こいつは俺をここまで連れてきてくれたんだ。だからそんな怖い顔しないでくれ」

俺はそう頼んだが、

霊「分からないわよ？油断させて後ろからガブッって食べるつもりかもしれない」

霊夢が手を口に見立てて、ジェスチャーをする。

その言葉にルーミアは何か言い返そうとしたが、その言葉を遮り

彩「それでも俺はルーミアはそんなことしないって信じてる」

魔「その根拠は、何なんだぜ？」

今度は魔理沙が聞いてきた。

その瞳は何かを期待しているようだった。

俺は悪戯を思いついた子供のような表情で自信を持って言い切った。

彩「勘だっ！！」

その瞬間、音が離脱した。

霊夢や魔理沙、ルーミアまでもがぽかんと口を開けて固まっていた。

そんな中、俺は言い切った爽快感と達成感に浸っていた。

先に沈黙を破ったのは魔理沙である。

魔「あっはははは！お前面白い奴だな～。霊夢、お前の専売特許無くなっちまったな」

そう言ってまたからからと腹を抱えて笑った。

霊「うっさいわね～、確かに面白い奴だとは思うけど。こんなとこ

ろで立ち話もなんだし上がりなさいよ、ルーミアも」

呆れたような口調、だがその顔は楽しげに笑っていた。

どうやら、魔理沙の期待に応えられたようだ。
そのことに安堵していると、背中に衝撃が走った。
見ると、目に少し涙を浮かべたルーミアが首に手を回し後ろから抱き付いてきていた。

ル「彩人、ありがと！」

彩「どういたしまして」

俺はルーミアの涙をそっと拭ってやった。

縁側に腰掛け出されたお茶を一口飲み一息つく。
む、うまいな。香りもいいし、入れ方が上手いな。
などと、感心していると

霊「それで、何だってこんなところまでやってきたのよ」

俺が一息ついたところを見計らって霊夢が聞いてきた。

魔「そうだぜ、わざわざ賽銭を入れるためだけに来たわけじゃないんだろ？」

魔理沙も興味があるらしく、こちらを見てきた。

彩「あー、それは俺をここに連れてきた張本人に聞いたほうがいいだろうな」

そういうと、二人はルーミアのほうを見た。
ルーミアは茶菓子を頬張っている。

彩「ああ、ルーミアじゃないよ。紫、居るんだろ？」

そういうと、奇妙な音を立てて空間に亀裂が走った。
亀裂は音を立てず広がっていき、中から俺をここに連れてきた張本人、八雲紫が上半身だけの姿で出てきた。

紫「はーい、意外と早かったわね」

相変わらず胡散臭い雰囲気と笑顔を貼り付けてそう言った。

彩「ま、運がよかったんだろ」

俺はそれにおどけたように返した。

魔「彩人って、外から来たのか？」

魔理沙が珍しいものでも見るかのように聞いてきた。

彩「気づかなかったのか？」

魔「ここら辺じゃ見かけない奴だな、とは思っていたが外から来た奴なんて初めて見たぜ」

こちらをじろじろと見てくる。むず痒いな。

霊「ちょっと、紫。また、何か企んでいるんじゃないでしょうね」

霊夢は外から来たことにあまり興味が無いのか、あからさまに嫌そうな顔をして紫を見る。

紫「あら霊夢、流石ね」

どうやら予感が的中したようで、霊夢はさもめんどくさそうな顔をしている。

彩「それは、俺がこの世界で暮らすことに関することか？」

多分これが理由だろう。
つか、落とされる前にそう言われたし

紫「あなたも理解が早くて助かるわ」

紫はうれしそうに笑う、胡散臭さは消えないが。

紫「あなたには能力が備わっている。それは現代ではとても危険なもの。ここはそういったものを全て受け入れる楽園」

楽園ね、少なくともあちらの世界よりは断然こちらのほうがいい。

彩「俺は、あちらの世界には戻れないのか？」

別にあちらの世界に未練は無い。無いが後腐れの無いように後始末だけはしたかった。
不意に服の袖が引かれた。

見ると、ルーミアがまるで迷子にでもなったかのような表情を浮かべていた。
その瞳は不安の色に揺れている。

ル「帰っちゃうの？」

声と手が震えていた。
俺は少し反省しながら、ルーミアを優しく抱き寄せて頭を撫でてやった。

彩「大丈夫だよ。ただ少しだけあっちの世界で後始末するだけだから」

どうやら不安は取り除けたようだ。
ルーミアは抱きついて頭をグリグリと押し付けてきた。
ルーミアの頭を撫でながら、話を進めた。

彩「それで、どうなんだ？」

紫「少しの間なら大丈夫よ」

なら、俺の答えは決まっている。

彩「俺は、この世界で生きていく」

その答えに紫は満足そうに笑い、

紫「そう。なら、あなたにはここで、１年間ほど修行してもらうわ」

彩「ここでって霊夢のところでか？」

紫「そうよ、ここで弾幕の打ち方と空の飛び方、能力の使い方を学んでもらうわ」

その言葉に霊夢は、

霊「それは別に構わないけど、報酬はあるんでしょうね」

ジト目でにらみつける霊夢に紫は、

紫「向こう1年間のお酒と食材の提供でどうかしら」

霊「乗ったわ！！」

その変わり身の早さに関心していると魔理沙が聞いてきた。

魔「彩人の能力って何なんだぜ？」

彩「さあ？わかんね」

その言葉に紫は、

紫「目を閉じて自分の中に意識を集中してみなさい」

言われたとおりにやってみると、すぐに見つけることができた。

彩「【流れを司る程度の能力】と【夢を繋げる程度の能力】か」

魔「どんな能力なんだ？」

彩「おそらく流れに関係するものは例外なく操れるとかそんなんだろ。夢を繋げる程度の能力についてはよくわからん」

魔理沙はなんだよそれー、と文句を言っていたが分からんものは分からん。

彩「ああ、それとなんか力みたいなのが二種類ほどあったな」

紫「それは霊力と魔力ね」

紫によると霊力は身体能力の向上や物へ付加能力を付けることができるらしい。
魔力は自然に干渉しないで現象を起こしたりするのに向いているが基本的にはどちらも同じように扱えるらしい。
ちなみに霊力と魔力が半分ずつ、総容量としては霊夢に少し劣るくらいだそうだ。パネェ・・・。
今後の方針も決まったし、そろそろ後片付けに行きますか。

彩「紫、1週間ほどあっちの世界に連れてってくれ」

紫「わかったわ、それじゃ行きましょう」

霊夢と魔理沙、ルーミアにしばしの別れを告げ少年は世界から消えるために元居た世界に帰っていった。

楽園の巫女と普通の魔法使い（後書き）

あぁ、とても眠い・・・

別れ、そして旅立ち（前書き）

連投です。
もしかしたら、もう一話投稿するかも？

別れ、そして旅立ち

ｓｉｄｅ～彩人～

紫「それじゃ、１週間後に迎えに来るわ」

そう言って隙間に戻っていった。

周りを見わたす。

見慣れた自分の家、外を見ればさまざまな人たちがせしわなく動いていた。

彩「帰ってきたのか」

この発展を遂げたゆえにすばらしく腐った世界に。

彩「さて、やることは山積みだ」

まずは、高校で退学の手続きをする。

クラスメイトには、決心が鈍るから、と８日目まで話さないことにしてもらった。

ご近所には引越しをする事と遠くに行くから多分戻ってこない事を伝える。

子供たちは号泣して胸が痛んだがなんとか納得してもらった。

６日目の日にはお別れ会を盛大にしてくれるという、ありがたいな。

やっぱりここの人たちのことは大好きだ、それだけは変わらない。

それから、親に連絡。

必要最低限の会話しかしていない。

といっても、こちらが一方的に話すだけであちらはただ聞いている

だけ。
唯一話したのは、「そうか」の一言だけ。
それを境に最後の会話は終了した。
それと、家の中を空っぽにするのに大分掛かった。
マンションなので家の中のものを根こそぎ片付ければいいのだが、
量が量だ。
全て片付けるのに2日掛かった。
後は最終日までで契約打ち切りの手続きをする。
せっかくだから、貯金を全て下ろしてルーミアや霊夢たちにお土産
を買っていく。
もっぱら、お菓子とジュース、後はお酒が多数。
大きめのダンボールで10箱は軽くある。
それでも全額使うには至らなかった。
通帳を見たとき軽く8桁はあった。
婆ちゃん、貯めすぎ。
これはあとで紫に相談してみるか。
もしかしたら、あっちでも使えるかもしれない。
6日目には約束どおり、お別れ会に行った。
子供たちが次から次へと泣きながら別れを惜しんでくれる。
全員を落ち着かせるのにかなり疲れたが、これでもう心残りは無か
った。
そんなこんなで、最終日。
日曜日の空は透き通るような青空だった。
旅立つには、もってこいの天気だ。
持ち物は、一週間分の着替えが入ったキャリーケース、愛用のエレ
キギター、去年の誕生日に婆ちゃんからもらった調理器具一式とダ
ンボール箱が十数箱。
不意に空間が割れ、隙間から紫が出てきた。
紫「後始末は終わったかしら?」

彩「まだ最後の用事が残ってるんだ。すぐに終わるから少し待ってくれないか？」

紫「わかったわ、後腐れの無いようにしておきなさい」

察してくれたのだろう、紫は快く承諾してくれた。

彩「ああ、あと待ってる間にこれ、あっちに運んでおいてくれないか？」

紫「あら、女性に力仕事をさせる気かしら？」

彩「見合った報酬は出せると思うぞ？」

紫は小さく息を吐き、

紫「分かったわ。報酬、期待してるから」

言うやいなやダンボールを全て隙間に落とした。

やっぱり便利だな。

彩「サンキュ、それとこっちの通貨ってあっちじゃ使えないよな？」

紫「当たり前じゃない、文明レベルが違うもの」

だよなぁ、と預金について思案していると

紫「何なら、換金してあげましょうか？」

彩「マジで?ぜひそうしてくれ。あと、持ちきれない分は紫が預かっててくれ」

これで、金のほうは片付いた。あとは、

彩「じゃ、そろそろいって来る。」

紫「ええ、いってらっしゃい」

俺は、これが最初で最後になるであろうあいつの家へと向かった。

彩「ここか」

俺は、家から歩いて大体15分くらいのところにある神社に来ていた。

ここにあいつはいる。

あいつにだけは自分の口で別れを告げなければいけないような気がしてここに来ていた。

正直、会いたくない。

だけど、会わずに行ったら絶対後悔する。

そんな確信めいた、勘が働いていた。

両の頬を両手ではたき、腹をくくる。

あいつが居るであろう境内に向けて階段を登リ出した。

あいつ、早苗は霊夢と同じような巫女服を着て境内の真ん中で掃除をしていた。
こちらに気づくと驚いた様子で掃除を中断し、こちらに駆け寄ってきた。

早「アヤじゃないですか、珍しいですね。それも、こんなに朝早くから神社に来るなんてやっとうちの信者になる気になったんですね」

いつもの調子で話しかけてくる早苗、しかしこちらの雰囲気が違うことに気づくと真面目な顔になった。

早「何か、大事な用があるみたいですね」

流石に何年も一緒に居ればそれくらいは分かるようになる。
そのことに感謝しつつ、俺はいきなり本題に入った。

彩「今日は、お別れを言いに来た」

早「・・・・・・」

早苗は黙ってこちらを見ている。
詳細を話し終わるまで黙っているつもりだろう。
俺は全てを話した。
これから遠くで暮らすこと。
電気もまともにないから連絡がつかないことなど簡潔に話した。
もちろん、幻想郷の部分やそれに関係するところは全て伏せたうえでだ。
全てを話し終えると早苗が口を開いた。

早「アヤにとって、そちらはそんなにも魅力的な場所だったのですか？」

その瞳は、嘘をつくこと許さない目だった。
だから俺は、まっすぐに見つめ返し

彩「ああ、最高の場所だった。すっげぇワクワクしてる」

子供っぽい笑顔で返した。

早「なら、私から言うことはありません。あっちでも、元気でね」

そう言って、早苗は笑っていた。
だから俺も、さっきとは違う笑顔で

彩「俺はどこでも元気だよ。早苗こそ俺が居なくなってから泣くなよ？」

早「その言葉、そっくりそのまま返してあげる。」

それから、お互いに笑いあった。
もう会えないかもしれないのに、二人はとても楽しげだった。

彩「それじゃ、そろそろいくよ。またな、早苗」

早「もう会えないかもしれないのに、別れの言葉がそれ？」

早苗は少し呆れていた。

彩「もしかしたら、またどこかで会えるかもしれないし、そっちの

ほうが楽しいだろ？」

早「それもそうね。じゃあ、またね」

彩「ああ、またな」

そう言って、紫が待っているマンションへ走り出した。

紫「用事は済んだの？」

部屋に入ると同時に、紫が出てきた。

彩「ああ、これで思い残すことはない」

紫「さっきよりもいい顔をしてるわ。男の子の顔になっている」

それが本当なら、あいつに感謝しないとな。

今すぐにでも泣き出したいはずなのに、それをおくびにも出さず最後まで笑っていた強い少女に。

紫が幻想郷へと続く隙間を開いて一足先に入っていった。

俺は、もう何もない部屋を振り返り

彩「俺も負けていられないな」

誰にも聞こえないようにポツリと言って隙間へ入った。

ｓｉｄｅ～早苗～

彼が帰ってから私は部屋に閉じこもった。
今は、誰にも会いたくなかった。
いや、違う。
一人だけ、あいつに会いたかった。
つい先ほどまで一緒に笑っていた、彼に。

早「危なかったな」

本当は途中で泣き出したかった。
泣くなよ？って言われたときは本当に危なかった。
彼の胸に飛び込んで、泣いてしまいたかった。
行かないで、そばに居てと言って引き止めてしまいたかった。
でも、私はそれをしないで笑って彼を送り出した。
上手く笑えていたかは分からない。
上手く笑えていても彼には無理をしているってバレているだろう。
分かるのだ。
あれだけ長い時間を一緒に居たから。
彼のことが好きか？と聞かれたら即答でＹＥＳと答えるだろう。
だがそこに恋愛感情があるかと言われれば微妙なところだ。
いつも一緒が当たり前になっていたから。
だから、本当は半身が切り裂かれる思いだったのだ。
それでも、泣かなかった自分を褒めてやりたい。

早「もう、泣いてもいいよね？」

瞬間、涙があふれてきた。
私は泣いた。
何が悲しくて泣くのか分からないまま泣いた。
だけど、泣いたままではいられない。
このままでは、彼に笑われてしまう。
私は、もうここには居ない彼に向けてつぶやいた。

早「ちゃんと・・・ヒック・・・立ち上がるから、前を向くから・・・ふぇぇ・・・だから・・・」

早「今はもう少しだけ、泣かせて・・・」

それから、泣き疲れて眠るまで私は泣いた。

別れ、そして旅立ち（後書き）

誰でも、親しい人との別れは辛いですよね。
でも、それを乗り越えてこそ強くなれると思う。

誤字等、訂正箇所がありましたらおねがいします

修行という名の・・・無茶振り？（前書き）

やっと、研修が終わった。
今日から投稿再開です。
それではどぞー。

修行という名の・・・無茶振り？

ｓｉｄｅ～彩人～

博麗神社の境内、突如として空間に亀裂がはしる。
いわゆるスキマである。
それは、音もなく広がっていき中からはこのスキマを作り出した張本人である八雲紫が出てくる。
ついで、元いた世界から幻想郷へと移り住む少年、狂咲彩人が出てきた。
外、現代での後始末を終え、紫と共に幻想郷へと帰ってきたのだ。

彩「ここは、博麗神社か？」

紫「そうよ、今日からここで修行するのよ。まさか忘れたの？」

彩「いや、覚えてるよ。で、具体的にはなにをするんだ？」

ここで生きていくためには弾幕を打てること、空を飛ぶことが必須になってくる。
人里で生活する分には必要ないのだが、できて損はないのでこちらとしてもありがたい。
それに空を自由に飛ぶって全人類の夢だし。

紫「それを教えるのは私の役目じゃないわ。じゃ、私は帰って寝るから後は霊夢に聞いて」

そう言って、スキマへと入っていく。

その姿を見送りながら俺はお礼を言った。

彩「紫、いろいろとありがとな。それから、俺をここに連れてきてくれてありがとう！」

自分が今できる最高の笑顔を紫に向けた。

紫は胡散臭い笑みではなく見た目相応の美しい笑顔で、

紫「どういたしまして。それと、幻想郷へようこそ。」

そう言って、スキマは閉じられた。

と思ったら、再度開き上半身だけ紫が出てきた。

紫「そうそう、今日は宴会ね。私の家族も連れてくるから。報酬、楽しみにしてるわよ？」

そう言って今度こそ帰っていった。

彩「さて、霊夢はどこに居るかな？」

俺は、修行を手伝ってもらうべく霊夢を探した。

霊夢と魔理沙は縁側でお茶を飲んでいた。

彩「ただいま、霊夢に魔理沙。」

霊夢たちのところに行き、帰ってきたことを告げる。

霊「あら、お帰りなさい。いつ帰ってきたの？」

彩「ついさっきだ。ルーミアは？」

魔「あいつなら、お前が後片付けに行ったあとすぐにフラフラとどっかに飛んで行ったぜ」

と、魔理沙が答える。
まあ妖怪だし、だいじょぶかと納得していると霊夢が口を開いた。

霊「彩人は今日からここに住むわけだけど、部屋は客間が開いているからそこ使って。あと、分かってると思うけど家事は当番制だからね」

と、俺の部屋のことと家事について提示してきた。
まあ、居候の身だし家事は得意中の得意だから文句ないけどね。

彩「ああ、分かった。じゃ、早速だけど空の飛び方から教えてくれ」

と、修行に入ろうとする。
実はさっきから早く空を飛べるようになりたくてうずうずしてたのだ。
それが伝わったのか、霊夢はクスッと笑いながら

霊「その前にこの幻想郷のこととスペルカードルールについて説明するわ」

確かに、この幻想郷で生きていくのだからここのことはよく知っておかなければならない。
それにチルノが使ってたカードみたいなもの（あれがスペルカードなのだろう）にも興味があったので特に反論もなかった。

彩「分かった。それじゃあ教えてくれ」

少女説明中・・・
少年静聴中・・・

霊「と、まあこんなかんじね」

要訳すると幻想郷は、人間、妖怪、妖精、神が種族に関係なく存在している世界らしい。
妖怪は人を襲い、人間は妖怪を退治するのが普通だ。
しかし、幻想郷では人間に友好的な妖怪も数多く存在する。
そうすると、人は妖怪を恐れなくなり、妖怪が存在できなくなってしまう。
妖怪とは、人の恐れから生まれたものだからだ。
また、妖怪のほうが比率が多いらしく力の強い妖怪は暇を持て余しやすくなるのだそうだ。
そこで、考え出されたのがスペルカードルールだ。
これは、スペルカードに自分の技などを込め必殺技のようにしたものである。
そして、互いに弾幕を打ち合い美しさを競うのが弾幕ごっこである。
これにより妖怪たちは暇を持て余すことが少なくなったらしい。
さらに、力の強い妖怪と人間が対等に渡り合うことができるようにする狙いもあるらしい。
欠点といえば争いが起こりやすくなったことだろうか。
ちなみに死ぬことはないが不慮の事故というのはあるみたいだ。

彩「なるほどな、すっごく楽しそうな世界だってことが分かった」

その答えに少々呆れたようだが霊夢はおもむろに立ち上がった。

霊「まったく、そろそろ弾幕の撃ち方と空の飛び方でも教えましょうか？」

魔理沙と俺は待ってましたと言わんばかりに立ち上がり、境内に出た。

霊「さて、まずは空の飛び方だけど・・・」

霊夢はいきなり困った顔をした。
どうしたのか、と聞くと

霊「いや、教えるって言っても私が飛べるのは【空を飛ぶ程度の能力】のおかげだからどうしたらいいのか分かんない」

いきなり手詰まりである。
魔理沙は笑っているし。

霊「と、とにかく自分が飛ぶようなイメージを思い浮かべてみなさい！私の勘がそうしろって告げているわ」

魔理沙に笑われ、少しむくれている霊夢に苦笑しつつ言われたとおりにやってみた。
すると、

彩「浮いた！？」

自分のイメージどうりに体が宙に浮いていた。

霊「ほら見なさい！」

と、霊夢が胸を張る。
いろいろと試してみたが、どうやらイメージが明確にできるから成功したみたいだ。
浮くまでが大変らしく、空中で動くことはそれほど難しくはないみたいだ。
あとは、飛んで体に覚えさせるしかないらしい。
ちなみに、浮いたからテンションが揚がりすぎて３０分ほど飛び回ったところで霊夢から止められた。

霊「さて、飛ぶことができたから次は弾幕ね。私みたいにお札に霊力を込めて放ってもいいし、魔理沙みたいにマジックアイテムを媒体にしてもいいし、霊力や魔力を弾の形にして放ってもいいわよ」

そういうと、霊夢と魔理沙がお互いに撃ち合って見本を見せてくれた。
考えた結果、好きな形で撃てるので霊力や魔力を弾幕にして撃つことにした。

彩「で、どうやって撃つんだ？」

魔「霊力や魔力を弾になって放つイメージで念じればいいんだぜ」

言われたとおりにやってみる。
前方５方向に丸い形の弾幕を１方向あたり５０発ほど放つイメージで力を練る。
今回は霊力で撃ってみる。
イメージはできた、あとは力を放出するだけ。
ドドドドドドドッ！！
イメージ通りの弾幕が出た。

彩「おおっ！できた！なあ霊夢、魔理沙、こんな感じでいいんだよな？」

弾幕がイメージどおりに出せたので興奮していると、

霊「まさか、たった数十分で撃てるようになるなんて」

魔「本当に外から来たのか疑いたくなるな」

二人は、はしゃいでいる彩人を見ながら呆れていた。

そろそろ、お昼の時間なので修行は中断し昼食を摂った。

昼食は霊夢が作ってくれた。

夜は俺らしい。

昼食後、俺は白紙のスペルカードを前にしてスペルの作成に勤しんでいた。

彩「避けづらいものにしようとするとしたら、やっぱ大量にそれでいてランダムにばら撒くようにすればいいけどそれだと綺麗じゃないしな・・・」

といろいろ、考えた結果何とか二枚作ることができた。

魔「おっ？できたのか？」

彩「まあ、とりあえず二枚できたよ」

魔理沙が様子を見に来たのでとりあえず完成したことを伝えると、

とんでもない事を言い出した。

魔「よし、それじゃあ弾幕ごっこしようぜ」

彩「は？ナニイッテンノ？」

思わず字がカタカナになってしまうくらい意味不明だった。

俺が、魔理沙と、弾幕ごっこ？ハハハッ、いくらなんでも勝てるわけねーじゃん。

あぁ、目がやる気満々だよこの子。

魔「手っ取り早く弾幕と空を飛ぶのに慣れるには実践が一番だぜ」

嘘だ、絶対面白がって言ってやがる。

どうやら、拒否権は無いみたいなのでため息をついて縁側から外に出た。

霊夢はちゃっかりお茶とせんべいを出して傍観者を決め込んでるし。

ある程度の高度まで上昇し、魔理沙がルールを言い出した。

魔「使用スペカは二枚、相手が降参あるいは戦闘不能になったら終了だぜ」

彩「ハァ、手加減してくれよ」

魔「そいつは無理だぜッ！！」

その言葉を合図に弾幕ごっこが始まった。

俺は、適当に魔理沙に向けて弾幕をばら撒いた。

魔「そんなんじゃ、当たんないぜ」

そりゃそうだ、当てるつもりなんてないからな。
これはいわば様子見、魔理沙は油断してるからそこを上手く突かないとこちらに勝機は無い。

魔「今度はこっちから行くぜ」

星型の弾幕がこちらに向かってくる。
が、全てどの軌道で飛んでくるか分かる。
どうやらチルノとの一戦で弾幕の流れが読めるようになったらしい。
弾幕が通らないところは簡単に分かるがわざと大きく避ける。
最小の動きで弾幕をかわし続けたら魔理沙も警戒するだろうしな。
だからわざと大げさに避ける。

魔「なかなかやるな。じゃ、そろそろ使わせてもらうぜ」

魔理沙がスペカを構え宣言する。

魔「魔符『スターダストレヴァリエ』」

瞬間、大量の星屑が周囲に撒き散らされる。
大きさは大小さまざまで、軌道が分かっていても飛ぶのに慣れていないため回避に限界がある。
仕方が無い、使うか。

彩「流星『スターダスト・レイン』」

上空から大量の星型弾幕が広範囲に落ちてくる。
それは魔理沙の弾幕を次々と相殺し魔理沙目掛けて落ちてゆく。

魔「なっ！わっ！わわっ！」

何とかかわしていくがあのままじゃそのうち被弾するだろう。
だがまだ油断はできない。
どちらもスペカがあと一枚残っているのだ。
ここで一気に決めたいところだが経験の少ない中で先に手札を切るのは得策ではない。

魔「ちぃっ、これでまとめて吹き飛ばしてやるぜ」

魔理沙がスペカを構えた。
俺もスペカを構える。
そして、同時に叫んだ。

魔「恋符『マスタースパーク』」

彩「狂咲『桜花爛漫』」

魔理沙が小さな箱のようなもの、八卦炉って言ったか？を構えた。
そこから、極太のレーザーが放たれる。
対して、こちらは桜の花びらを象った無数の弾幕、それこそ視界が花びらで埋まるほどに大量の弾幕が広範囲に展開される。
この花びら一枚一枚に霊力または魔力を込めているので、当たり判定があるからまず避けきる事など不可能だ。
その分燃費がものすごく悪いけど。
魔理沙のレーザーと俺の桜吹雪がぶつかり合う。
双方互角で拮抗していたが、徐々にこちらが押され始める。
魔理沙はあのレーザーを維持するために動けないはず。
対して、こちらは動ける。
なら取るべき行動はひとつ。

魔「まとめて、吹き飛べぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

魔理沙がさらに火力を上げ、ついに桜吹雪に風穴が開き霧散していく。

そこに彩人の姿は無かった。

魔「ぜぇ、ぜぇ。や、やりすぎちまったか？」

魔理沙は息切れを起こしながらも彩人の姿を探した。

彩「まったくやりすぎだ。初心者相手になんつうもんぶっ放すんだよ」

魔「！！！」

俺は魔理沙の背後にまわって弾幕を形成したまま話す。

彩「これで、チェック・メイトだな？魔理沙」

勝ったことが何よりうれしくて自然と笑みがこぼれる。

魔「まいったな、降参だぜ」

魔理沙は両手を挙げて負けを認めた。

霊「お疲れ様。魔理沙に勝つなんてやるじゃない」

縁側まで降りていくと、霊夢が賞賛の言葉をくれた。

彩「サンキュ。でも、実力で勝ったわけじゃないし。何より、魔理沙が油断してたから勝てたんだよ」

魔「くそー、まさか負けるなんて思ってもみなかったぜ」

俺は霊夢の言葉に苦笑し、魔理沙は悔しがっている。

彩「さて、そろそろ夕飯の用意でもするか」

霊「えっ？もう？早くないかしら？」

現在時刻は４時を少し過ぎたあたり、初夏で夕飯の準備にしては早すぎる時間帯である。

彩「今日は、紫と紫の家族も来るからな。あと、荷物を運んでくれた礼をするって約束したから豪勢にいきたいんだ。それに・・・」

と言いかけて、台所へ行こうとし

彩「ルーミアも来そうだしな。ま、ちょっとした宴会になるんじゃないか？」

そう言い台所へ向かう。

その背中に霊夢と魔理沙は、

霊「そこまで言うんなら・・・」

霊・魔「「期待してるわよ（ぜ）！！」」

声をそろえて、期待してきた。
仲良いなと思いながら、

彩「期待された！」

おどけた調子で答えた。

修行という名の・・・無茶振り？（後書き）

弾幕ごっこが上手く表現できない・・・ｏｒｚ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8001y/

東方夢桜歌～A little tenderness and some courage～

2011年12月17日23時52分発行